

『シナイモツゴ郷の米で淡水魚最後の楽園 「里山のため池」を守る』

かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会
会長 吉田 千代志

シナイモツゴ郷の米の圃場には、ウミネコが5月の代掻き時期から田植え後の6月中旬まで飛来してくる様になりました。これは、餌となるドジョウ・アメリカザリガニに加え、圃場整備後に増えてきたツブ貝などの要因があり水環境が改善されて来た証と考えています。

平成20年に10名の会員で始まった「かしまだいシナイモツゴ郷の米」の取り組みも、令和2年秋の収穫期で13年目を迎える事となりました。

以下、これまでの活動経過と今後の課題を示しながら、生産・販売活動について検証してみました。

代掻き後の圃場には、大崎市のご当地キャラクター“パタ崎さん”も田植えの手伝いに駆けつけ、秋口の豊作を願いながら丁寧に苗を植え付けます。また、別の圃場では平成28年に「シナイモツゴを守れ！～絶滅危惧種のため池で自然再生～」としたテレビ放映の取材撮影が行われた事もあり、シナイモツゴの棲むため池の水も温み、苗が元気にすくすくと伸びるよう願いながら作業が進められました。



また、溜め池のブラックバスが減少した事により、広長川のブラックバスが減少し貴重な魚が戻って来ました。これらの環境保全の成果から、26年度から大崎市が主催する「おおさき生きものクラブ」観察会の会場となっています。おそるおそる水に入る子ども達ですが、水に慣れるのは束の間です。中には腰まで水に浸かりながら魚を追う子どももいて、捕まえた魚に歓喜が溢れる小川になりました。



なお、ブラックバスの駆除が確認された溜め池で、例年行っているシナイモツゴ放流会も令和2年は9月に坪下沢溜め池で実施し、里親制度として近隣の小学校で孵化され丹精込めて育てられた稚魚を、子ども達がそれぞれのバケツに小分けし「大きくなってね！」と静かに水に放されました。





シナイモツゴの稚魚が数匹の集団をつくり元気に泳いでいく様が印象的で、着実に自然再生に繋がる活動を行っている事を実感した内容でした。

例年、7月には郷の米認証のために、NPO 法人シナイモツゴ郷の会の水質・水系認証制度により生産圃場の確認と水質調査を受けています。

この郷の会の認証米としての基準は、①シナイモツゴの生息している溜め池の水を使う事。②環境保全米である事。の二点の他に、つくり手の会において溜め池の水を生活雑排水の入らない水田として生産区域を定め、安心・安全をより担保したお米を生産する事としています。



なお、シナイモツゴを放流できる溜め池の確保に努めるとともに、生態系の保全に向けてブラックバスの駆除作業に取り組んでおり、平成30年は蒜沢溜め池で実施しました。この溜め池は、以前にバス駆除を実施した事もあり、結果、コイ・フナで700匹程の捕獲から外来魚駆除の成果が出たと考えております。

今後のバス放流を防ぐために、広長地区の環境保全隊においても以前からのブラックバス放流禁止看板に加え、新たにシナイモツゴ放流溜め池としての看板を設置し、子ども達と共に行っている保護活動を一般にも周知する対策も行っています。



シナイモツゴ郷の米の生産・販売の取り組みには、まだまだ改善しなければならない事項が多くありますが、市内学校給食の日には栽培方法・品質に特にこだわったお米として、私たちが生産するこの郷の米が給食用米として採用・提供されている事も大変励みとなっています。

また、地域の恵まれた自然環境を守りながら、天然記念物シナイモツゴが生息するため池の補修・維持にも努め、さらにはNPO法人・大崎市・関係機関・消費者の皆様と連携しての取り組みは、米づくりへの理解促進や活性化のためにも大変重要だと捉えています。



この様な取り組みや活動を着実に進めながら、今後も地域の自然を守り続け、地域のブランド米として生産・販売を確立出来る様に頑張っていきたいと考えていますので、尚一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

